

看護短期大学生の性格特性に関する基礎的研究（第3報）

－看護短期大学の看護学生の自己成長に関する研究－

加城貴美子 大江 基 陣田泰子 國岡照子 柴原君江

竹内文生 美田誠二 青木康子 井澤方宏

要旨

入学年度別1年次の比較検討と、1995年度入学の1年次から3年次までと1996年度入学生の1年次から2年次までの比較検討をTAOKを用いて分析した結果を以下に示す。

1. 1995年度入学生の「基本的構え」は「自他否定」、次いで「自他肯定」であるが、1996年度入学生と1997年度入学生は「自己否定・他者肯定」が多く、次いで「自他否定」であった。
2. ピーク・エゴグラムは、全ての入学年度で、ACが高い。
3. ボトム・エゴグラムは、全ての入学年度で、CP、NPとAが低い。
4. 1995年度入学生の1年次から3年次までに「基本的構え」に変化がみられた。
5. 1996年度入学生の1年次から2年次までに「基本的構え」に変化がみられた。
6. 成長の動機づけは、2年次は「短期大学の友人との関わり」が最も多く、次いで「1人暮らし」の順であった。3年次は「様々な病棟実習」が最も多く、次いで「短期大学での友人との関わり」であった。

キーワード：交流分析 基本的構え 自己成長

I はじめに

健康に関わる専門職として幅広く活躍できる人材の教育には、健康に関する知識・技術を身につけることも大切であるが、人間を対象とする援助者としての専門職者には、人間を総合的に見る眼を養うことが望まれる。そのためには自己理解ができ、自己成長することは欠かすことができない。在学中にこのような意識をもつことは大切である。中山ら¹⁾²⁾は入学時のオリエンテーションで行われた性格テストが、学生の学生生活における自己の成長にどのような影響を与えているかを調査している。そして個別面接の際に性格の結果の説明を、入学時にいただいた身体面あるいは精神面の不安に対する相談あるいはこれからの大学生活についてのアドバイスとあわせて行っている。看護学生のエゴグラムや性格についての調査^{3)～13)}を実施し、教育に反映していると推測できるものもあるが、学生に調査結果をフィード

バックして自己成長の気づきの機会としているところは少ない。

交流分析では、ある人が自分自身と他人について、どう感じどんな結論を下しているかということを、その人の「基本的構え」といつている¹⁴⁾。「基本的構え」は、幼少期の養育に影響されるが、その後の人生経験など（ライフイベント）により変化するといわれている¹⁾が、それらに関する研究は少ない。「基本的構え」は、自他肯定を目的とした自己改善のための方法で、テストにより「基本的構え」の歪みを知ることができ、調和のとれた人間関係を営むための方向づけが可能である。本学では、1995年度入学1年次生から入学年度毎に Transactional Analysis and OK positions（以下TAOKと略す）関係の基礎調査を実施してきた^{15) 16)}。1995年度・1996年度・1997年度入学生の1年次を比較して、本学看護

学生の入学年度別集団特性の相違を明かにする。さらに、1995年度入学生に1年次から3年次まで3回、1996年度入学生の1年次から2年次までに2回の同様な調査を実施し、「基本的構え」の変化を比較する。その結果、看護教育のありかたについての示唆を得たので報告する。

II 研究方法

1. 対象：

本短期大学の1995年度・1996年度・1997年度入学1年次生各80名を対象とし、研究に同意の得られた1995年度入学1年次76名、2年次78名、3年次73名、1996年度入学1・2年次77名、1997年度入学1年次79名であった。1995年度入学生の1年次から3年次の研究に同意し3回とも調査協力した看護学生は、70名であった。

2. 内容：

①TAOK ②2年次に入学してから現在までの間、「自分はどのようなことで変化したと思うか」「何が自分の成長の動機になったか」を自由記述形式で記入させた。③3年次に2年次の4月から現在に、2年次と同内容の記入を求めた。

3. 調査時期：

1995年度入学生は、1年次は7月下旬、2年次・3年次は4月中旬、1996年度入学生の1年次・2年次とも4月中旬であり、1997年度入学生1年次も4月中旬であった。

4.TAOK

TAOKは、交流分析（Transactional Analysis）の考え方に基づいて作られた検査であり、水野ら¹⁷⁾により開発された心理検査で、120問からなるリッカート・タイプの尺度である。

交流分析は、自分の性格上の問題点を自己分析によって気づき、他者との人間関係を自分でうまくコントロールできるように学習していく方法である。交流分析では、人間は「親」「成人」「子ども」という3つの自分を持つとしており、それらを自我状態と呼んでいる。「親」の自我状態P（Parent）の部分にはCP（Critical Parent＝父性的な親、批判的な親）とNP（Nurturing Parent＝母性的な親、保護的な親）に分けられ、「成人」の自我状態はA（Adult＝事実に基づいて決断する働き）、「子ども」の自我状態C（Child）はFC（Free Child＝自由な子ども）とAC（Adapted Child＝順応する子ども）に分け

られる。そして、自分の中の自我状態がどのようになっているかを客観的に知る方法としてエゴグラム（Egogram）がある。また一方、交流分析では、幼児期に親との触れ合いが主体となって培われた人間と人生に対する態度を、その人の「基本的構え」のうちの1つを身につけていると考えている。「基本的構え」は4つに分類され、①私もOK、あなたもOK（自己肯定・他者肯定）②私はOK、あなたはOKでない（自己肯定・他者否定）③私はOKでない、あなたはOK（自己否定・他者肯定）④私はOKでない、あなたもOKでない（自己否定・他者否定）、である。そして、TAOKは、エゴグラム（以下OKエゴグラムという）と「基本的構え」という2つの面から総合的に人間を捉えることによって、よりよい人間関係を営むために具体的に自分のどこをどのように変えていくのがよいのかを知る手がかりとなる。

5. 分析方法：

TAOKを用いた結果を入学年度別1年次の比較、1995年度入学生の1年次から3年次までの変化の比較と1996年度入学生の1年次から2年次までの変化の比較検討した。統計処理は汎用統計学パッケージSPSSを用い χ^2 検定、 t 検定、一元配置分散分析を行った。

III 結果

1. 「基本的構え」による割合

TAOKの結果得られた入学年度別1年次生の「基本的構え」の割合をTable 1に示した。1997年度と1996年度入学生は「自己否定・他者肯定」が最も多く、次いで「自他否定」であった。1997年度と1996年度入学生は、「自他肯定・他者否定」が最も少なかった。1995年度入学生は、「自他否定」が最も多く、次いで「自他肯定」で、「自己肯定・他者否定」と「自己否定・他者肯定」がほぼ同数であった。

2年次では、1996年度入学生は「自他否定」が同

Table 1 「基本的構え」による割合 n (%)

	自己肯定 ・ 他者肯定	自己肯定 ・ 他者否定	自己否定 ・ 他者肯定	自己否定 ・ 他者否定	その他	合 計
1年次						
1995年入学生	21(27.6)	10(13.2)	12(15.8)	33(43.4)	0	76(100.0)
1996年入学生	12(15.6)	8(10.4)	28(36.4)	26(33.8)	3(3.9)	77(100.0)
1997年入学生	15(19.0)	14(17.7)	25(31.6)	23(29.1)	2(2.5)	79(100.0)
2年次						
1995年入学生	15(19.2)	11(14.1)	12(15.4)	39(50.0)	1(1.3)	78(100.0)
1996年入学生	12(15.6)	8(10.4)	28(36.4)	26(33.8)	3(3.9)	77(100.0)
3年次						
1995年入学生	18(24.7)	13(18.6)	19(27.1)	22(30.1)	1(1.4)	73(100.0)

数であったが、1995年度入学生は「自他否定」が多くなっている。1995年度入学生の3年次の「基本的構え」は、「自他肯定」が少なくなり、「自己肯定・他者否定」と「自己否定・他者肯定」が多くなっている。さらに「自他否定」は減少している。

2. ピーク・エゴグラム

TAOKの結果得られたエゴグラムの一番高い部分を Figure 1 に示した。1995年度入学生・1996年度入学生と1997年度入学生ともAC優位が圧倒的に多く、次いで極端に下がりFC優位の順であった。

1996年度入学生は他年度入学生よりFC優位が少い。

3. ボトム・エゴグラム

TAOKの結果得られたエゴグラムの一番低い部分を Figure 2 に示した。1995年度・1996年度と1997年度入学生はCP低位とA低位が多く、1995年度と1997年度入学生は、NP低位が多くみられる。

4. ピーク・エゴグラムとボトム・エゴグラムの変化

TAOKの結果得られたエゴグラムの一番高い部分を、1995年度入学1年次から3年次までについて Figure 3 に示した。2年次と1年次にAC優位が最も

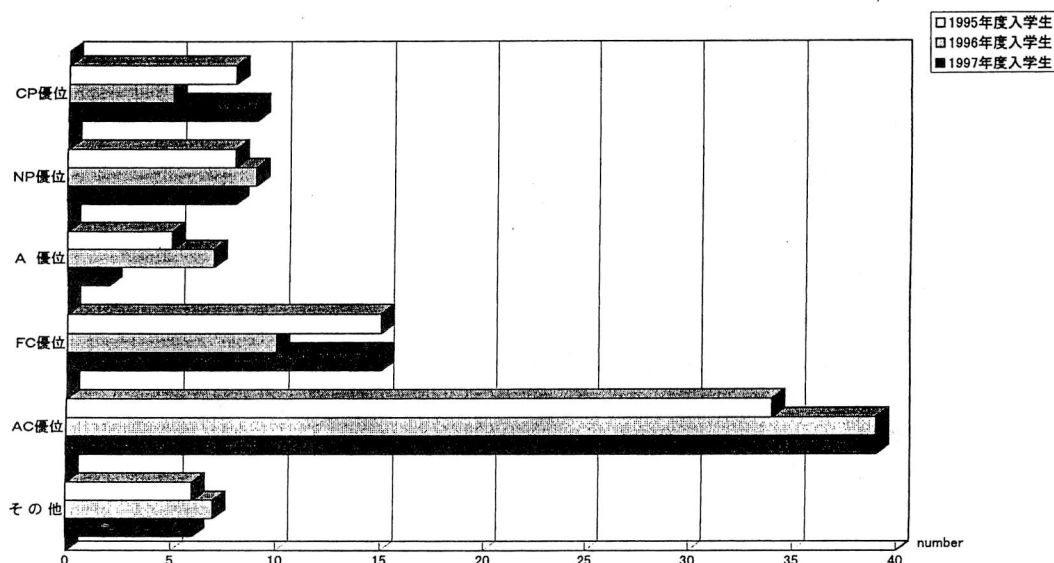


Figure 1 入学年度別1年次のPeak Ego gram

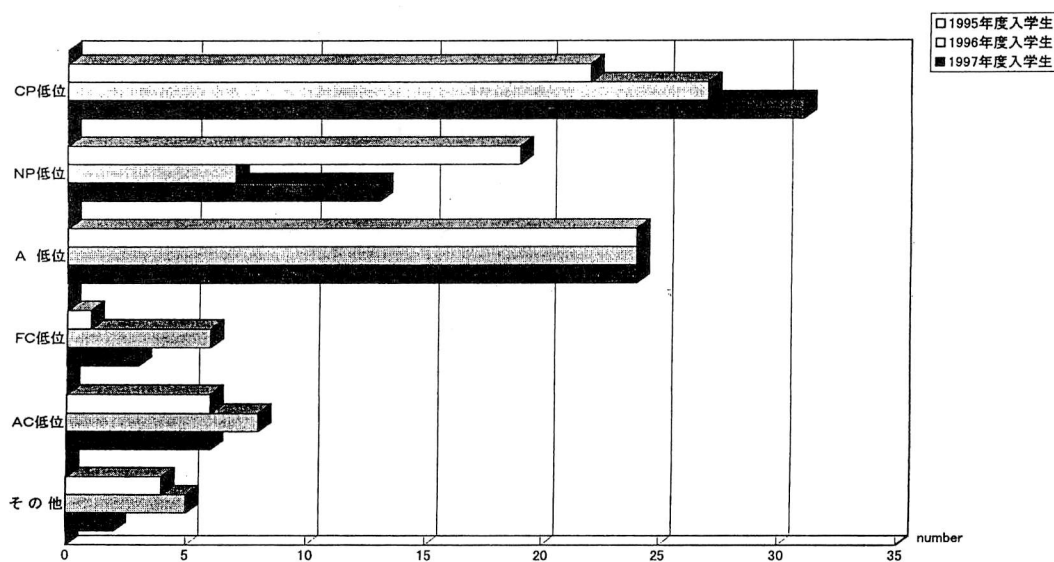


Figure 2 入学年度別1年次のBottom Ego gram

多くみられたが、3年次には減少している。CP優位も1年次・2年次と比較して3年次も減少している。その反面、FC優位が1年次から2年次、2年次から3年次と増加している。Table 2-1、2-2、2-3に1995年度入学生の「基本的構え」とピーク・エゴグラムの変化による分類を1年次・2年次と3年次別に示した。1年次・2年次と3年次とも最も多いのがAC優位、次いでFC優位であった。CP優位・NP優位とA優位の人数が極端に少なかった。「自他肯定」では、1年次から3年次までAC優位が多く、「自他肯定」はNP優位の傾向である。

エゴグラムが一番低い部分をFigure 4に示した。1995年度入学1年次CP低位が2年次で減少したが、3年次には1年次より多くなっている。さらに、NP低位も1年次2年次より3年次で減少している。A低位は、1年次の時が最も多く、2年次に減少したが、3年次に2名多くなっている。FC低位も2年次3年次に2名増加している。

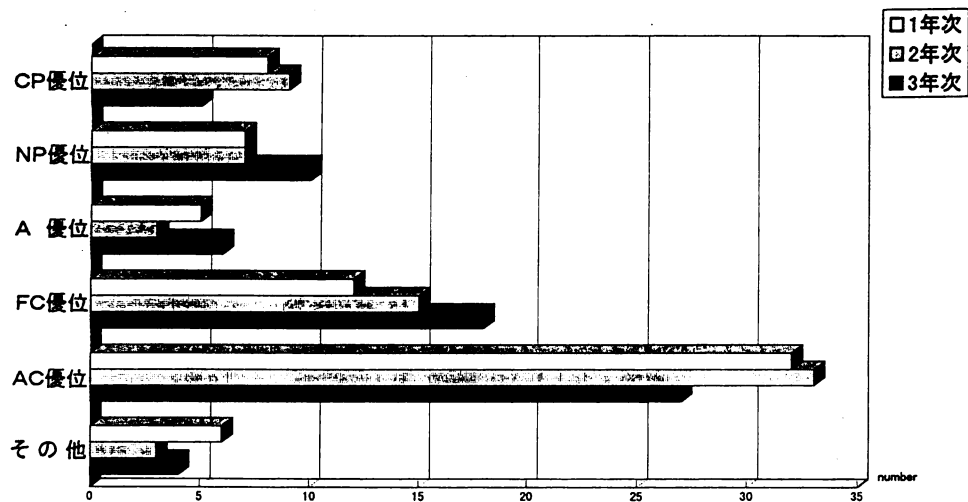


Figure 3 1995年度入学生学年別のPeak Egoogram

Table 2-1 ピーク・エゴグラムの変化による分類 [1995年度入学生]

n (%)

<div>1年次</div> <div>1年次</div>	CP優位	NP優位	A優位	FC優位	AC優位	その他	合計
自他肯定	1(1.4)	7(10.0)	2(2.9)	3(4.3)	4(5.7)	1(1.4)	18(25.7)
自己肯定・ 他者否定	3(4.3)		1(1.4)	2(2.9)	2(2.9)	1(1.4)	9(12.9)
自己否定・ 他者肯定			1(1.4)	2(2.9)	8(11.4)	1(1.4)	12(17.1)
自他否定	4(5.7)		1(1.4)	5(7.1)	18(25.7)	8(11.4)	31(44.3)
合計	8(11.4)	7(10.0)	5(7.1)	12(17.1)	32(45.7)	12(17.1)	70(100.0)

$\chi^2 = 33.16741$ $p < 0.01$

Table 2-2 ピーク・エゴグラムの変化による分類 [1995 年度入学生]

n (%)

2 年次 2 年次	C P 優位	N P 優位	A 優位	F C 優位	A C 優位	その他	合 計
自他肯定	1(1.4)	5(7.1)		4(5.7)	5(7.1)		15(21.4)
自己肯定 ・ 他者否定	4(5.7)	2(2.9)	1(1.4)	2(2.9)		1(1.4)	10(14.3)
自己否定 ・ 他者肯定				1(1.4)	9(12.9)	1(1.4)	11(15.7)
自他否定	3(5.7)		2(2.9)	8(11.4)	19(27.1)	1(1.4)	33(47.1)
その他	1(1.4)						1(1.4)
合 計	9(12.9)	7(10.0)	3(4.3)	15(21.4)	33(47.1)	3(4.3)	70(100.0)

Table 2-3 ピーク・エゴグラムの変化による分類 [1995 年度入学生]

n (%)

3 年次 3 年次	C P 優位	N P 優位	A 優位	F C 優位	A C 優位	その他	合 計
自他肯定		7(10.0)	2(2.9)	5(7.1)	1(1.4)	2(2.9)	17(24.3)
自己肯定 ・ 他者否定	4(5.7)		2(2.9)	4(5.7)	3(4.3)		13(18.6)
自己否定 ・ 他者肯定		3(4.3)	2(2.9)	3(4.3)	9(12.9)	2(2.9)	19(27.1)
自他否定	1(1.4)			6(8.8)	13(18.6)		20(28.6)
その他					1(1.4)		1(1.4)
合 計	5(7.1)	10(14.3)	6(8.8)	18(25.7)	27(38.6)	4(1.4)	70(100.0)

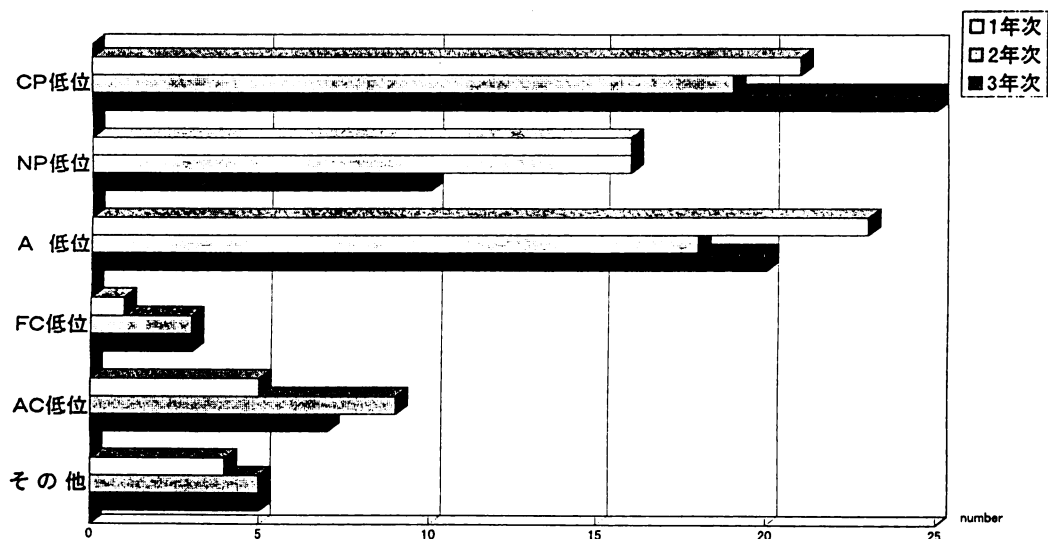


Figure 4 1995 年度入学生の学年別 Bottom Egogram

Table 3-1 「基本的構え」の変化による分類
[1995 年度入学生]

		n (%)				
2 年次	1 年次	自己肯定 ・ 他者肯定	自己肯定 ・ 他者否定	自己否定 ・ 他者肯定	自己否定 ・ 他者否定	合 計
自己肯定	Aグループ 14(20.0)	3(4.3)	1(1.4)	Gグループ		18(25.7)
自己肯定 ・ 他者否定		Bグループ 6(11.8)		Fグループ	3(4.3)	9(12.9)
自己否定 ・ 他者肯定		Fグループ 1(1.4)	Cグループ 8(11.4)		3(4.3)	12(17.1)
自己否定	Eグループ 1(1.4)		Dグループ 2(2.9)		27(38.6)	31(44.3)
合 計	15(21.4)	10(14.3)	11(15.7)	33(47.1)	1(1.4)	70(100.0)

Table 3-2 「基本的構え」の変化による分類
[1995 年度入学生]

		n (%)				
3 年次	2 年次	自己肯定 ・ 他者肯定	自己肯定 ・ 他者否定	自己否定 ・ 他者肯定	自己否定 ・ 他者否定	合 計
自己肯定	Aグループ 12(17.1)	2(2.9)	1(1.4)	Gグループ		15(21.4)
自己肯定 ・ 他者否定	3(4.3)	Bグループ 6(11.8)		Fグループ	1(1.4)	10(14.3)
自己否定 ・ 他者肯定		Fグループ 10(14.3)	Cグループ 1(1.4)			11(15.7)
自己否定	Eグループ 2(2.9)	5(7.1)	Dグループ 8(11.4)	17(24.3)	1(1.4)	33(47.1)
その他				1(1.4)		1(1.4)
合 計	17(24.3)	13(18.6)	19(27.1)	20(28.6)	1(1.4)	70(100.0)

Table 3-3 「基本的構え」の変化による分類
[1995 年度入学生]

		n (%)				
3 年次	1 年次	自己肯定 ・ 他者肯定	自己肯定 ・ 他者否定	自己否定 ・ 他者肯定	自己否定 ・ 他者否定	合 計
自己肯定	Aグループ 13(18.6)	4(5.7)	1(1.4)	Gグループ		18(25.7)
自己肯定 ・ 他者否定	1(1.4)	Bグループ 6(8.6)	1(1.4)	Fグループ	1(1.4)	9(12.9)
自己否定 ・ 他者肯定	1(1.4)	Fグループ 1(1.4)	Cグループ 8(11.4)		3(4.3)	12(17.1)
自己否定	Eグループ 2(2.9)	3(4.3)	Dグループ 9(12.9)		16(22.9)	31(44.3)
合 計	17(24.3)	13(18.6)	19(27.1)	20(28.6)		70(100.0)

5. 「基本的構え」の変化による分類

1995 年度入学生の「基本的構え」の変化による分類を Table3-1、3-2、3-3 に 1 年次と 2 年次、1 年次と 3 年次、2 年次と 3 年次を示した。「基本的構え」で変化しないグループを「自己肯定」は A グループ、「自己肯定・他者否定」を B グループ、「自己否定・他者肯定」を C グループ、「自己否定」を D グループ、「自己肯定・他者否定」と「自己否定・他者肯定」での変化を F グループとした。E グループは「自己否定」のプラスの変化であるが「自己肯定」からはマイナスの変化となる。G グループは「自己肯定」のマイナスの変化を示しているが、「自己否定」からするとプラスの変化を示している。2 年次にプラス方向へ変化したのは 4 名 (5.7%)、マイナス方向への変化は 11 名 (15.7%) であった。3 年次では、プラス方向への変化は 18 名 (25.7%)、マイナス方向への変化は 7 名 (10.0%) であった。

1996 年度入学生の「基本的構え」の変化の分類を Table 4 に示した。1 年次から 2 年次にプラス方向

Table 4 「基本的構え」の変化による分類
[1996 年度入学生]

		n (%)				
2 年次	1 年次	自己肯定 ・ 他者肯定	自己肯定 ・ 他者否定	自己否定 ・ 他者肯定	自己否定 ・ 他者否定	合 計
自己肯定	Aグループ 4(5.8)		3(4.3)	Gグループ	3(4.3)	11(15.9)
自己肯定 ・ 他者否定	3(4.3)	Bグループ 3(4.3)	1(1.4)	Fグループ	1(1.4)	8(11.6)
自己否定 ・ 他者肯定	5(7.2)	Fグループ 11(15.9)	Cグループ 9(13.0)			25(36.2)
自己否定	Eグループ 1(1.4)	2(2.9)	Dグループ 17(24.6)	1(1.4)	22(31.9)	
その他	1(1.4)		2(2.9)		3(4.3)	
合 計	14(20.3)	5(7.2)	16(23.2)	32(46.4)	2(2.9)	69(100.0)

への変化は 13 名 (18.8%)、マイナス方向への変化は 21 名 (30.4%) であった。

6. 「基本的構え」と自我状態の平均値と標準偏差

1995 年度入学生の 1 年次、2 年次と 3 年次の「基本的構え」と自我状態の平均値と標準偏差との関係を Table 5 に示した。1 年次では、「自己肯定」が最も高い自我状態は NP と FC である。「自己肯定・他者否定」は、CP と FC の得点が高かった。「自己否定・他者肯定」と「自己否定」では、AC と FC が高

Table 5 「基本的構え」と自我状態の平均値と標準偏差
[1995年度入学生]

		自他肯定			自己肯定 ・ 他者否定			自己否定 ・ 他者肯定			自他否定			全 体		
		\bar{x}	\pm	SD	\bar{x}	\pm	SD	\bar{x}	\pm	SD	\bar{x}	\pm	SD	\bar{x}	\pm	SD
1 年次																
批判する私	(CP)	n=18 46.3	\pm	8.94	n=9 57.4	\pm	9.57	n=12 40.7	\pm	9.20	n=31 47.7	\pm	11.26	n=69 47.4	\pm	8.94
		**			**			*								
優しい私	(NP)	54.7	\pm	7.46	46.4	\pm	12.14	46.4	\pm	12.14	41.5	\pm	13.20	47.3	\pm	12.10
					***			**								
考える私	(A)	48.0	\pm	9.45	48.0	\pm	8.83	42.1	\pm	9.75	41.4	\pm	8.34	44.0	\pm	9.30
					**											
自由な私	(FC)	54.6	\pm	5.42	56.4	\pm	8.89	49.5	\pm	6.88	50.6	\pm	7.77	52.2	\pm	7.51
人に合わせる私	(AC)	50.4	\pm	10.01	49.7	\pm	9.42	59.3	\pm	8.97	59.1	\pm	10.19	55.7	\pm	10.60
		*			**			*								
								**								
2 年次																
批判する私	(CP)	n=15 46.1	\pm	9.82	n=10 55.8	\pm	13.84	n=11 41.3	\pm	7.42	n=33 47.0	\pm	11.14	n=69 47.2	\pm	11.14
					**			*								
優しい私	(NP)	55.3	\pm	5.35	47.6	\pm	12.69	51.4	\pm	3.75	39.9	\pm	11.34	46.2	\pm	11.41
					*			***								
考える私	(A)	44.7	\pm	8.97	46.9	\pm	8.24	45.5	\pm	10.21	43.2	\pm	9.19	44.8	\pm	9.09

自由な私	(FC)	54.1	\pm	5.51	54.4	\pm	5.72	52.1	\pm	7.30	52.2	\pm	8.53	52.8	\pm	7.30
人に合わせる私	(AC)	49.3	\pm	11.47	47.9	\pm	8.93	61.9	\pm	8.29	58.0	\pm	10.34	55.1	\pm	11.13
					***			***								
		**						*								

3 年次																
批判する私	(CP)	n=17 37.1	\pm	6.59	n=13 56.5	\pm	14.75	n=19 38.7	\pm	6.78	n=2 41.5	\pm	9.96	n=69 42.4	\pm	11.66
		***			***			***								
優しい私	(NP)	56.4	\pm	4.78	54.5	\pm	5.72	52.8	\pm	9.93	37.4	\pm	9.93	49.6	\pm	12.36
					***			***								
考える私	(A)	46.4	\pm	11.09	48.8	\pm	9.82	42.6	\pm	11.35	37.6	\pm	13.36	43.3	\pm	11.74
					***			*								
自由な私	(FC)	55.1	\pm	5.46	57.4	\pm	7.29	52.3	\pm	8.37	51.5	\pm	8.34	53.6	\pm	7.73
								*								
人に合わせる私	(AC)	43.8	\pm	9.52	50.3	\pm	14.70	58.3	\pm	9.96	60.4	\pm	10.9	53.9	\pm	12.61
					***			*								
					***			***								

* p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001

かった。2年次では、「自己肯定」のNPが最も高く、次いでACである。「自己肯定・他者否定」は、CPとFCが高かった。「自己否定・他者肯定」と「自己否定」はACとFCの得点が高い。3年次でも1年次と2年次と同様、それぞれの「基本的構え」で高い自我

状態は同じ傾向にある。「基本的構え」と各自我状態は、1年次から3年次まで、CP、NP、A、ACで有意差 (p<0.05 p<0.01 p<0.001) がみられた。3年次には、FC間でも「自己肯定・他者否定」と「自己否定」とに有意差 (p<0.05) がみられた。

Table 6 「基本的構え」と自我状態の平均値と標準偏差
[1996年度入学生]

		自他肯定	自己肯定	自己否定	自他否定	全 体
		\bar{x} \pm SD	他者否定 \bar{x} \pm SD	他者肯定 \bar{x} \pm SD	\bar{x} \pm SD	\bar{x} \pm SD
1 年次						
批判する私	(C P)	n=11 50.6 \pm 11.16	n= 8 55.9 \pm 11.53	n=25 43.2 \pm 7.80	n=22 45.4 \pm 9.10	n=66 46.6 \pm 9.84
		* ***				
優しい私	(N P)	56.2 \pm 3.82	51.0 \pm 14.78	54.8 \pm 7.84	49.0 \pm 6.50	52.6 \pm 8.31
		*** **				
考える私	(A)	46.0 \pm 11.95	46.0 \pm 9.93	49.5 \pm 10.06	50.0 \pm 9.41	48.2 \pm 10.26
自由な私	(F C)	58.1 \pm 5.91	56.5 \pm 5.81	51.8 \pm 7.18	53.0 \pm 7.82	54.0 \pm 7.30
		*				
人に合わせる私	(A C)	55.1 \pm 13.35	51.0 \pm 15.18	58.5 \pm 11.87	60.1 \pm 7.14	57.7 \pm 11.32
2 年次						
批判する私	(C P)	n=14 48.1 \pm 8.01	n= 5 60.2 \pm 12.93	n=16 38.5 \pm 4.21	n=32 46.7 \pm 10.69	n=67 46.1 \pm 10.38
		*** ***				
優しい私	(N P)	53.3 \pm 6.41	40.6 \pm 16.62	54.4 \pm 5.32	44.3 \pm 10.81	48.4 \pm 10.53
		*** ***				
考える私	(A)	45.9 \pm 11.13	53.6 \pm 11.46	45.9 \pm 10.86	43.3 \pm 9.80	45.3 \pm 10.43
		*				
自由な私	(F C)	57.0 \pm 7.92	59.4 \pm 4.77	51.8 \pm 9.68	54.1 \pm 8.47	54.6 \pm 8.49
人に合わせる私	(A C)	52.7 \pm 12.15	49.4 \pm 14.79	57.3 \pm 11.82	62.4 \pm 6.11	57.9 \pm 10.60
		*				

* p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001

* p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001

1996年度入学生の「基本的構え」と自我状態の平均値と標準偏差について Table 6 に示した。1 年次では、「自他肯定」と「自己肯定・他者否定」の最も高い自我状態は FC、「自己否定・他者肯定」と「自他否定」の高い自我状態は AC であった。2 年次では、「自他肯定」は FC、「自己肯定・他者否定」は CP、

「自己否定・他者肯定」と「自他否定」は AC の自我状態が最も高かった。「基本的構え」と各自我状態は、1 年次に CP、NP と FC で有意差 ($p < 0.05$ $p < 0.01$ $p < 0.001$) がみられた。2 年次には、CP、NP、A と AC にそれぞれ有意差 ($p < 0.05$ $p < 0.01$ $p < 0.001$) がみられた。

7. 自己成長に影響を与えた要因について

1995年度と1996年度入学生の自己成長に影響を与えた要因として、人間関係、生活に影響する要因、個人的要因、学業に関する要因をTable 7に示した。1995年度入学生の2年次で最も多いのが「短期大学の友人との関わり・話し合い」で、次いで「1人暮らし

らし」と「自分を見つめ、考える機会があったこと」が同数であった。「教師との関わり・アドバイス」や「短期大学の授業」をあげている学生がいた。しかし、「あまり成長していない」と自覚している学生もいた。3年次では「様々な病棟実習」が最も多く、次いで「短期大学の友人との関わり・話し合い」や「自

Table 7 自己成長に影響を与えた要因

影 響 要 因			1996年度入学生 2年次 n=69	1995年度入学生 n=70 2年次 3年次	
人間関係	1	様々な人との出会い・関わり	10 (14.3)	8 (11.4)	7 (10.0)
	2	短期大学の友人との関わり・話し合い	11 (15.9)	21 (30.0)	8 (11.4)
	3	実習での人々との出会い・関わり	0	1 (1.4)	12 (17.1)
	4	学外の人々との出会い・関わり	2 (2.9)	2 (2.9)	0
	5	異性とのつきあい	0	0	1 (1.4)
	6	教師との関わり・アドバイス	3 (4.3)	5 (7.1)	5 (7.1)
	7	家族との関わり	1 (1.4)	6 (8.6)	3 (4.3)
	8	環 境	2 (2.9)	2 (1.4)	3 (4.3)
		合 計	29 (42.0)	45 (64.3)	39 (55.7)
生活影 か響 ら要 の因	9	短期大学生生活	4 (5.7)	2 (2.9)	1 (1.4)
	10	一人暮らし	10 (14.3)	12 (17.1)	4 (5.7)
	11	日々の出来事・体験	2 (2.9)	2 (2.9)	3 (4.3)
	12	アルバイト	3 (4.3)	4 (5.7)	2 (2.9)
		合 計	19 (27.5)	20 (28.6)	10 (14.3)
個 人 的 要 因	13	自分を見つめ、考える機会があったこと	9 (13.0)	12 (17.1)	10 (14.3)
	14	様々な感情を味わったこと	1 (1.4)	2 (2.9)	1 (1.4)
	15	色々なことに興味を持ったこと (旅行・映画・本)	1 (1.4)	1 (1.4)	2 (2.9)
	16	病気・けが	0	0	1 (1.4)
	17	趣 味	0	1 (1.4)	0
	18	ゆ と り	1 (1.4)	2 (2.9)	1 (1.4)
		合 計	12 (17.4)	18 (25.7)	15 (21.4)
学す 業る に要 関因	19	短期大学の授業	10 (14.3)	8 (11.4)	1 (1.4)
	20	テ ス ト	2 (2.9)	1 (1.4)	0
	21	勉強したこと (人間・看護について学んだこと)	2 (2.9)	4 (5.7)	3 (4.3)
	22	様々な病棟実習	4 (5.7)	1 (1.4)	30 (42.9)
		合 計	18 (26.1)	14 (20.0)	34 (48.6)
そ の 他	23	時が経った・年月の経過	0	2 (2.9)	1 (1.4)
	24	あまり成長していない	3 (4.3)	7 (10.0)	4 (5.7)
	25	白 紙	12 (17.4)	5 (7.1)	10 (14.3)
		合 計	15 (21.7)	14 (20.0)	15 (21.4)

分を見つめ、考える機会があったこと」であった。
1996年度入学生の2年次で最も多いのは、「短期大学の友人との関わり・話し合い」、「様々な人との出会い・関わり」の人間関係が最も多い。次いで「一人暮らし」や「短期大学の授業」をあげている。

各要因の合計数は、1995年度と1996年度入学生の2年次では有意な関係はなかった。1995年度入学生の2年次と3年次では、2年次に「人間関係」、「生活からの影響要因」と「個人的要因」が3年次より多く、3年次は2年次と比較して「学業に関する要因」の中の「様々な病棟実習」をあげており、有意差（ $p < 0.05$ ）がみられた。

8.「基本的構え」の変化と自己成長に影響を与えた要因との関係

1995年度入学生の2年次と3年次、1996年度入学生の2年次の「基本的構え」の変化（プラス方向への変化、変化なしとマイナス方向への変化）について Table 8 に示した。1995年度・1996年度入学生は、2年次にプラス方向への変化と比較してマイナス方向への変化の方が自己成長に影響を与えた要因をあげている学生が多い。1995年度入学生の3年次では逆にプラス方向への変化を多くあげているが有意差はみられなかった。1996年度入学生の2年次のプラス方向への変化とマイナス方向への変化ではマイナス方向への変化で影響要因をあげているのが多く、有意差（ $p < 0.05$ ）がみられた。

IV 考察

1.「基本的構え」について

1995年度入学生は、1年次に「自他否定」が約半数弱を占めており、「自他肯定」は1/4強を占める集団である。1996年度と1997年度入学生は、「自己否定」の占める割合が多く、1996年度入学生は54名（70.2%）、1997年度入学生は48名（60.7%）となり、「私はOKでない」という構えを持っている。1995年度入学生の1年次と2年次はほぼ同数が「自己否定・他者肯定」と「自他否定」であった。3年次になると「自他否定」が最も多いが、「自己否定・他者肯定」、「自他肯定」の順になり、2年次に「自他否定」の構えであった学生がそれ以外の構えになりプラスの変化がみられた。中山ら²⁾の調査では、「基本的構え」は1年次4年次とも「自他肯定」が多く、4年次では半数を越えていた、と報告している。しかし、看護学生の「基本的構え」の継続調査は非常に少ない。本短期大学に入学してくる学生が「自他否定」あるいは「自己否定」の多い集団であるのかについては今後追跡していく必要がある。

「自他肯定」のグループは、「基本的に信頼感を自分にも他人にも持つことができ、人生の途中で困難や挫折に出会うことがあっても、自他に対する信頼を失わず、やり通せると思うことが可能である」¹⁾といわれている。母親および父親より理想的な愛情としつけを受け、「自他肯定」の構えを身につけて成人となることは難しいといえる。3年間の追跡で、2年次から3年次にかけて「基本的構え」に変化が生じた。これは「基本的構え」を変化させる何らかの要因があったと推測される。しかし、半数以上の学生が「自己否定」の「基本的構え」をもっていること

Table 8 自己成長に影響を与えた要因群と「基本的構え」の変化

n (%)

	1996年度入学生			1995年度入学生					
	2年次 n=69			2年次 n=70			3年次 n=70		
	プラスの方 向への変化 n=13	変化なし n=35	マイナス方 向への変化 n=21	プラスの方 向への変化 n= 5	変化なし n=54	マイナス方 向への変化 n=11	プラスの方 向への変化 n=18	変化なし n=47	マイナス方 向への変化 n= 5
人 間 関 係	6(8.7)	14(20.3)	11(15.9)	5(7.1)	33(47.1)	7(10.0)	10(14.3)	26(37.1)	3(4.3)
生活からの影響	2(2.9)	8(11.6)	6(8.7)	0	17(24.3)	3(4.3)	2(2.9)	7(10.0)	1(1.4)
個人的要因	5(7.2)	4(5.8)	3(4.3)	2(2.9)	13(18.6)	3(4.3)	5(7.1)	9(12.9)	1(1.4)
学 業 関 係	5(7.2)	6(8.7)	7(10.1)	1(1.4)	13(18.6)	0	10(14.3)	21(30.0)	3(4.3)
そ の 他	1(1.4)	10(14.5)	4(5.8)	1(1.4)	10(14.3)	3(4.3)	4(5.7)	11(15.7)	0
合 計	19(27.5)	42(60.7)	31(44.9)	9(12.9)	86(122.9)	16(22.9)	31(44.3)	74(105.7)	8(11.4)
$\chi^2 = 8.21686$			$\chi^2 = 5.76263$			$\chi^2 = 2.16319$			

は、力強さに欠けた雰囲気を持っている集団であるので、自信を持つような働きかけが大切である。さらに、看護の専門職としての学びや臨床実習の中で、困難や挫折に出会うときどのように対処したらよいか、の指導も必要となってくる。

2. 自我状態について

自我状態の最も高いのは入学年度別の1年次をみると各入学年度ともACが極端に高い。加藤ら⁴⁾の3年課程全日制女子106名のエゴグラムパターンはAC(順応の子ども)が他の要素に比べ高く、学年別の比較でも2年生と3年生も同様の傾向がみられた、と報告している。中山ら¹⁾の調査でも同様の結果がみられた。ACが高いことは、協調性に富み、順応に優れていると推測されるが、FC(自由な子ども)が低いので、学生は本当の気持ちを抑えて親や上司・教員の期待に添おうと努めているのではないかと考えられる。看護学生は、広い専門的知識が求められていく中で、短期間で実習場に慣れ、学習していく学生生活にはACが高いことも必要である。しかし学生が自然な感情を表さないマイナス面がでてくる可能性があるので、感情を表現できる機会を持つことも大切である。

本短大生の自我状態の最も低いのは、CP(批判的な親)、NP(保護的な親)とA(事実に基づいて決断する働き)である。看護職はNPが高く、コミュニケーションも上手にとれると期待されており、3年コースの短期大学あるいは4年制大学の看護学生でNPが高いという報告が多い^{5) 10) 12) 18)}。杉田ら¹⁸⁾は、看護科学生と一般の短期大学生のエゴグラム調査をしているが、NPが高くCPの低いM型を示し、これが看護科学生に共通したパターンと述べている。また、進学コースの看護学生の調査でもNP優位の報告³⁾がされている。遠山ら⁷⁾は、看護婦(看護婦若年群、中年群と高年群に分けて)と看護学生の自我状態の比較をしているが、看護学生も看護婦もNPが優位に高いと報告している。これは、看護婦としてクライアントに対して、父親的な厳しさ、母親的な共感、思いやり、保護などプラスのストロークを活用する専門職であり、さらに看護上の事実に基づいて冷静に判断するという科学的な側面も重要である、と述べている。中山ら²⁾の報告では、1年での自我状態の最高値の割合はACが高いが4年ではNP高値の割合が高いと報告している。しかし、本短大の看護学生の自我状態はCP、NPとAが低位であ

り、看護の専門職としてクライアントに関わるときに、学生がNPの自我状態を高めるように意識的に、学生の中のNPとAを引き出す努力・教育が必要と思われる。

3. 「基本的構え」と自我状態の平均値と標準偏差との関係

「基本的構え」と自我状態は、「自他肯定」だとNPとFCが高い。「自己肯定・他者否定」はCPとFCが高い。「自己否定・他者肯定」と「自他否定」は、ACとFCが高い。これは本学学生の「基本的構え」と自我状態は一致していることを示している。また、全体のエネルギーが中程度以上であるといえる。この自我状態であると、学生の活気、他者に対する積極性も中程度といえる。それぞれの「基本的構え」は、学生の自我状態と一致して表情や行動に表れてくると予測できる。「基本的構え」と自我状態との関係では、FC優位の学生は少ないが、全体にFC優位の学生の得点は高い。優位でみるとACが極端に多くなっているが、エネルギーからみると中程度以上であり、臨機応変にFC(自由な子ども)を出しているのではないかと考える。

4. 「基本的構え」と自己成長に影響を与えた要因との関係について

自己成長の動機づけの要因は、2年次は「人間関係」、「一人暮らし」と「短大の授業」などがあり、「基本的構え」がプラスに変化した学生より、マイナスに変化した学生の要因の数が多い。3年次は2年次の要因数との比較では、「学業に関する要因で、様々な病棟実習」をあげているのは「基本的構え」がプラス方向の学生が多かった。中山ら²⁾の研究でも、自己成長の動機づけの要因は、①学内の友人との関わり、②看護実習、③様々な人との出会い・関わりの順と述べている。今回、学生の調査で、自分がプラスになった自己成長の要因あるいはマイナスになった要因に分けての質問ではなく、自己成長に影響したと思われる要因をあげてカテゴリー化したのが、同様な結果となった。特に「様々な病棟実習」を動機づけにあげているのは、臨床実習で種々のことを真剣に考える機会があったためと推測される。臨床実習を通して、学生は自分の性格上の問題点を自己分析によって気づき、他者・クライアント・医療チームのメンバーの一人として、人間関係をうまくコントロールできるように学習したのではないかと考える。

V おわりに

今回、入学年度別の1年次を比較検討した。さらに、同入学年度の1年次から3年次までの追跡調査を検討した。その結果、看護婦として期待されるNPやAが高い学生が少なく、ACが高い学生が圧倒的に多くいた。これについては今後継続して調査し、

看護婦の「優しい・保護的態度」がどの過程で生じてくるのかをみて行く必要がある。さらに、「基本的構え」あるいは自我状態の変化を促す要因についても調べて行く必要がある。

最後にこの研究にあたり調査に協力してくださった本学看護学生の皆さんに心から感謝いたします。

引用文献

- 1) 中山久子、飯田澄美子：単科大学における看護学生の健康管理に関する研究－自己の成長に向けて－、聖路加看護大学紀要、No.19、25-36、1993.
- 2) 中山久子、飯田澄美子：単科大学における看護学生の健康管理に関する研究（第3報）－TAの活用を試みて－、日本交流分析学会 第19大会、45、1994.
- 3) 井佐真知子、川端美津子、高須賀勝恵他：エゴグラムによる看護学生の自我状態の一考察、看護実践の科学、99-102、1990.
- 4) 加藤美砂、宇山京子、河原博子他：エゴグラムによる看護学生の自我状態の一考察、クリニカルスタディ、Vol.9、No.7、35-38、1988.
- 5) 稲葉佳恵、丸山知子：看護学生の性格特性と自我状態の変化、交流分析研究、Vol.14、No.1・2、9-16、1989.
- 6) 殿岡幸子、谷口興一、河野エイ他：医学生・看護学生におけるエゴグラムの検討、交流分析研究、Vol.18、No.2、129-134、1994.
- 7) 遠山 敏、藤田美津子：エゴグラムによる看護婦の自我状態の特性について、看護展望、Vol.13、No.7、1988.
- 8) 佐伯恵子、安森由美、曾我久子：看護教育における教師の役割－逆N型エゴグラムを示した学生の自己と他者受容のプロセスより－、交流分析研究、Vol.8、No.1・2、9-17、1984.
- 9) 林 公子：エゴグラムからみた学生の自己像と客観像、愛知県立看護短期大学雑誌（21号）、1-5、1989.
- 10) 石川りみ子、中宗根曾代子、長浜マチ子他：看護学生の入学動機とエゴグラムの関連性について、第24回日本看護学会看護教育分科会、
- 11) 前田よし子、興俵千代子、金城靖子他：看護学生の自己開発に関する検討（第1報）－健康調査表及びエゴグラムの変化－、第22回日本看護学会看護教育、207-209、1991.
- 12) 多田昭栄、尾方美智子：エゴグラムによる看護学生の自我状態の観察、第15回日本看護学会看護教育、132-135、1984.
- 13) 杉田明子、太湯好子、酒井恒美他：短大看護学科学生の東大式チェックリストによるエゴグラムに関する基礎的検討、第22回日本看護学会看護教育、204-206、1991.
- 14) 杉田峰康、新里里春、水野正憲：TAOK活用手引き、適性科学研究センター、1980.
- 15) 加城貴美子、大江基、陣田泰子他：看護短期大学生の性格特性に関する基礎的研究、川崎市立看護短期大学紀要、第1巻第1号、23-34、1996.
- 16) 大江基、加城貴美子、陣田泰子他：看護短期大学生の性格特性に関する基礎的研究（2）、川崎市立看護短期大学紀要、第2巻第1号、69-78、1997.
- 17) 水野正憲、杉田峰康：OKエゴグラムによる自己理解－自我状態と基本的構えの総合的理解－、交流分析研究、Vol.9、No.1・2、35-42、1984.

A Basic Research on Nursing College Students' Personality Traits(the third report)
— A study of self-growth of nursing students of college of nursing —

Kimiko KASHIRO Motoi OE Yasuko JINDA Teruko KUNIOKA Kimie SHIBAHARA
Humio TAKEUCHI Seiji MITA Yasuko AOKI Masahiro ISAWA

Department of Nursing Kawasaki City College of Nursing

abstract

We investigated the relationship between self-growth and the result of TAOK(Transactional Analysis and OK positions). The research was made on freshmen of our nursing students who entered in 1995, 1996, 1997, juniors who entered in 1995 and 1996, and seniors who entered in 1995, with the aim of clarifying the factors influencing their self-growth in their school life, and differences in feature of character caused by groups who entered at our college in the same academic year. The results were as follows:

1. OK positions by TAOK varied according to school year or year of entering college.
2. Administrations of TAOK on juniors and seniors gives opportunities to facilitate their self-awareness.
3. OK positions by TAOK varied from 1st to 3rd grade who entered in 1995.
4. In the same way, OK positions by TAOK varied between 1st and 2nd grade who entered in 1996.
5. As to students who entered in 1995, factors that motivated their self-growth during 2nd grade are 'relations with college friends', 'experience of living alone away from home', and 'having opportunities of considering and reflecting on themselves'. Those factors during 3rd grade are 'various experiences during internship at wards', 'relations with various people including patients during internship' and 'having opportunities to consider and reflect on themselves'.
6. As to students who entered in 1996, motivations of their self-growth during 1st and 2nd grade are 'human relations, encounter with various people and relations with college friends', 'experiences of living alone', 'lectures and practices at college' and 'having opportunities to consider and reflect on themselves'.

Key Words : Transactional analysis

Transactional analysis of OK positions

Self-Growth